

(5) 貝 類

2025 年版レッドリストに掲載された貝類のうち、新たにリストに掲載された種（いずれも情報不足種）について、簡易な解説を記述した。

1. ミジンナタネ *Punctum atomus* Pilsbry et Hirase

陸産貝類 柄眼目 ナタネガイ科 (国：リスト外)

北設楽郡で近年も図示とともに記録されている種である（早瀬・他, 2021）が、微小種でもあり生息情報自体が少なく、これまでの記録に近似種のハリマナタネ *P. japonicum* と本種が誤認された例もあり、今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

2. コウフオカモノアラガイ *Neosuccinea kofui* (Patterson)

陸産貝類 柄眼目 オカモノアラガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

豊田市で 2022 年に山間部の谷津田で確認されたが、国内移入の可能性も否めないとされている（河辺・他, 2023）。ヒメオカモノアラガイなどを含めた本種群については、一地域での断片的な産出状況が報告されているが、調査不足や分類学的な区別の困難さから過去の生息状況との比較もできておらず、今回は情報不足と判断された。

3. ハクサンベッコウ *Nipponochlamys hakusana* (Pilsbry et Y. Hirase in Y. Hirase)

陸産貝類 柄眼目 シタラ科 (国：情報不足)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータも極めて少ないため、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

4. トガリキビ *Parakaliella acutanguloides* Kuroda et Azuma

陸産貝類 柄眼目 シタラ科 (国：情報不足)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータも極めて少ないため、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

5. オオコウラナメクジ *Nipponarion carinatus* Yamaguchi et Habe

陸産貝類 柄眼目 オオコウラナメクジ科 (国：準絶滅危惧)

県内の分布域の詳細が判明しておらず、ナメクジ類の標本を含めた過去のデータが極めて少ないことも踏まえ、今回は情報不足と判断された。今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。

6. カワネミジンツボ *Akiyoshia kawanensis* Habe, in Masuda et Habe

淡水産貝類 エゾタマキビ目 ヌマツボ科 (国：情報不足)

豊橋市で 2022 年に生息が確認された地下水系に生息する微小な巻貝。本種の特殊生息環境の調査、分布域の把握は極めて不十分なので今回は情報不足と判断された。本種の生息域の特殊性より高いカテゴリーの種である可能性がある。

(執筆者 木村昭一)

7. カワコザラ *Ferrissia nipponica* (Kuroda in S. Uchida)

淡水産貝類 モノアラガイ目 ヒラマキガイ科 (国：絶滅危惧ⅠA類)

分子系統解析および形態の再検討で、これまでカワコザラとされてきた種の大半は移入種メリケンコザラ *F. californica* (Rowell, 1863) の誤同定と判明した。日本在来のカワコザラも実在しているが、現在では山間の水系など人為的影響の少ない生息環境に生息が確認されている。近年の調査で岡崎市の湿地で少数個体が採集された。形態の検討より在来種のカワコザラである可能性が示唆された。殻径 4mm、笠形、螺塔は低く、殻質は薄く脆い。殻表は成長脈以外平滑。分布調査、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

8. ヒメヒラマキミズマイマイ *Gyraulus* sp.

淡水産貝類 モノアラガイ目 ヒラマキガイ科 (国：絶滅危惧ⅠB類)

最大個体でも殻長 0.5mm、殻径 1.7mm 程度の螺層数 3 層平巻きの微小種。本種は、本州から南西諸島、東京都島嶼部にかけて日本国内に広く分布する未記載種であり、学名は確定していない。近年の調査で岡崎市の湿地等で少数個体が確認されている。分布調査、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)

9. シナヤカスエモノガイ *Thracia concinna* Reeve

淡水産貝類 スエモノガイ目 スエモノガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

田原市で 2021 年に海岸に漂っていた死殻 2 個体の 1 例が確認された、県内に確実に生息しているとは断定できず、愛知県周辺の県並びに市における分布の現状を考えると生息していた可能性が高く、今後データの集積により高いカテゴリーの種と評価される可能性がある。しかし、分布調査（潮下帯の追加調査）、個体数の把握も不十分なので今回は情報不足と判断された。

(執筆者 木村昭一)